

# 大和物語

## 姫捨

①信濃の国に更級といふ所に、男住みけり。

②若きときに親死にければ、をばなむ親のごとくに、  
若い時 付き添つて世話をし いた が  
若くよりあひ添ひて ある に、

死ん だ ので 姉 が  
が すんでい た  
は 増らし が  
常ににくみ つつ、

③この妻の心、憂きこと多くて、この姑の老いかがまりてゐる  
若い時 老いて腰が曲がる た  
は 増らし が  
姿

④男にも、このをばの御心の、さがなくあしきことを

言ひ聞かせけれ ば、  
以前 ようで  
身に 対し て  
ので

⑤昔のごとくに も あらず、おろかなる こと多く、

このをばのため に なりゆき けり。  
娘 とても ひどく  
娘 ひどく  
腰が 扱れ曲がつ  
腰が 扱う  
が 憂地悪く ひどい

⑥このをば、いと いたう 老いて、二重 にて い たり。  
娘 とても ひどく  
娘 ひどく  
腰が 扱れ曲がつ  
腰が 扱う  
が 憂地悪く ひどい

⑦これをなほ、この嫁 、所狭がりて、今まで死なぬ ことと思ひて、  
このこと いつそう  
娘 ひどく  
腰が 扱れ曲がつ  
腰が 扱う  
が 憂地悪く ひどい

よからぬ ことを 言ひ つつ、⑧「持て いまして、  
男に姫の よく ない (告げ口) 言つ ては 「持て」 サ変「い+坐す」  
娘 ひどく  
腰が 扱れ曲がつ  
腰が 扱う  
が 憂地悪く ひどい

深い山に捨て給びてよ。」とのみ責めければ、  
深い なさつ  
いやになつ そのように てしま おう  
深き山に捨て給びてよ。」とのみ責めれば、

確述

⑨責められわびて、さして むと思ひなりぬ。  
男は いやになつ そのように てしま おう  
責められわびて、さして むと思ひなりぬ。

⑩月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ 約へ。  
明るい ばあさんよ さあ いらっしゃい  
月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ 約へ。

「来」の代わり  
それを  
申す  
ところだ  
といふ  
催して  
法会を  
ありがたい

なる、ことだ  
見せ奉らむ。  
——

法会催を

か  
喜ん  
で  
男に  
背負

言ひたけれど、ばので、ことのほか限りなく喜びで、負はれてしまつたけり。

① と言ひにれば、アリたぐ喜びて負はれしに

⑫ 高き山の麓に住み  
ければ、その山にはるばると入りて、  
高い 住んでいたたのて 奥深く 入る

高い  
で  
下りてこられ そうに ない  
所  
置いを 姉

高き山の峰の、下り来べくもあらぬに置きて逃げて来る。

(13) 姫は  
「やや。」と言へ  
ど、返事もせし  
で逃げて、家こられて思ひを考  
え続けていると

妻が告げ口を

(14) 言ひ腹立てける折は、腹立ちて、かくしつれ

長年 ように 養い 続けて 互いに 緒に暮らし た の

十五年ころ新のこと養ひ三三あひ添ひにけれは

たいとう 悲しく 思われ  
たいそう 悲しく た  
いと 悲しく けり。

(16) この山の上より、月もいと  
限りなく明かくて出でたるを眺めて、

（）  
一晩中  
主  
ミ  
ミ  
ミ  
ミ  
、  
、  
悲しく  
思われ  
た  
の

①夜一夜寝む氣に付て悲しきおはなしれは

このようには  
詠んでだそうだ  
かくに  
よみたりける。

(18) わが心慰めは  
かねことはできない  
つ  
更級や姨捨山に照る月を見て

(19) とよみ 詠んで で  
てなむ、また行きて迎へ 捨てた所へ 研究?  
持て連れて 来にた そうだ  
ける。

(20) それよりから | のち | なむ、姨捨山といひ | ける。 | たそだ  
後 | 言つ

慰めがたしとは、これが  
縁語として詠まれるの  
よしになむありける。  
曲来であつたそだ